

4月21日 ~ 26日
331-8708

竹原会議声明草案です

(A) 野上案

(B) 名古屋案に74加えるべきものとして、名古屋から提案されたもの。名古屋に於ける他の修正案は、A)に含み込んでいるものと省略する。

A) 昨年秋のいわゆる「ハバ」危機は、世界核戦争の戦慄を改めて感じさせました。その危機の余波はなお今日まで納まらず、現在の複雑な国際緊張の真相と明らかとし、世界の平和と確保のための具体策を探し求めるというすべての人間に課せられた課題の緊急な重要さをますます切実に感じさせます。

私達は本会議において、昨年発表した「科学者京都会議の声明」と今日の時点で全面的に再確認すると共に、アジアをめぐり国際情勢と科学者の社会的責任の両面を中心に討論を行いました。

合意に達した主要な諸点は次のとおりであります。

1. 最初に、科学はしばしば誤って考えられているように戦争ではなく、平和と結びつた発展するものであることを強調します。科学の発展には平和が不可欠な条件であり、我々、科学の発展は平和の創造に寄与するべきであります。このことから、科学の事業に必要となるには平和を要求する権利が生じると共に、我々科学者としての立場から平和の確保に積極的に貢献すべき社会的責任が生じてきます。この立場を確保しつつ、わが国の科学者は広く団結して学問の健全な発展のための計画を自主的に作り上げるべき必要があり、同時に、すべての国の

c091-006-032

科学者と平等互恵の立場において大規模の口陳動カを行へべきであり。日本学術会議が政府に勧告した科学研究基本法の意義は上述の観点からも強調されるべきであります。すなわち、科学者は今日、自らと携った専門に用いながら、しかも自らの専門を越え、平和と確保を目的とする事業に参加して、その責任を果すための努力とすべきであると考へます。

2. 米国の世界核戦略行制は、軍事技術の進歩と背景として、冷戦事件以後もなお急速な展開とみせています。最近の原子力潜水艦のわが国の港への寄港回数はその一つのあらわれとして、沖縄を含むわが国の核戦略上の比重は益々高まって一月高まって行きます。しかし、この様な核戦略行制の強化は、[ハグワオフレニ会議のつとに指摘しているように、] 在野諸国民の安全を保障するどころか、逆に核戦争勃発の危険を増大させるばかりであります。私達は、わが国が、全面完全軍縮の実現を当面の現実的な目標として、一日も早く外国の核戦略行制のミグナと脱し、核非武装の原則を貫くべきであると考へます。これはわが国の平和憲法と守り、PVAの平和に貢献するに必要の最低条件であると考へて行きます。

3. 第2次大戦後、とりわけPVA・アフリカ地域では、久しにわたる

植民地状態から脱却し自由・独立の道と歩むとする諸民族の運動は、アジアの帝国主義的干渉との104%抗争の15%に昂揚して行きます。私達はかつて中東・朝鮮半島のアジア諸国に對して取すべき帝国主義的侵略者でありました故に、今日再び同様の犯罪とくり返すまいと決意するは、日本人として主義的・道義的信念をなすはをりせぬ。また、植民地は低い生活水準に悩む植民地あるいは低開発諸国の存在そのものが、国防緊張の結果で対要因で起る深刻な事態の存在は、この事態の解決のため、科学の少なからざる貢献をなしていることは、ウーレン宣言以来、バグダッド会議が再三指摘していることであつた。私達はここに、日本の科学者の、アジア人の一員として、諸民族の独立の達成と、民族の主権に對する平和な生活の確立と、切實に願う立場に於て、その技術とせめていさゝかの貢献をなし得る可能性をみとめたのであります。

4. 私達はアジア地域に於けるすべての緊張や紛争の根源の中・米両国家の不正當な関係にあると考へて居る。米日は二十長斗に於て、中東に對し実質的戦争状態を続けたいと言わねばなりません。中・米両国間のこの紛争の持続は、わが国の将来にとって最も望ましくないものであり、私達日本の科学者はこの紛争の内容を分析し、その結論に對してこの紛争を終息せしめるための

可能性の発見に努める特別の責任と負っています。この点について私達の
到達した結論は、加口の自主的な努力によってまず先に
日中両口の正常な関係と回復することです。上述の中、米
両口間の紛争と終息せしめるための可能性、最も有効な手段で
あり、日際緊張緩和に向けて加口の尽力による最大の貢献である
こととであります。

以上、私達は、今回の討議について到達した、一、二の具体的な
提案を含む結論の主要な点と列挙します。私達は、この結論の
下での日本の科学者・技術者に対して、私、ご自身や多くの
氏に対して検討をお願いしますと望みます。

B) 科学はもともと、その真理探求の真執な姿勢と、国際協力の友誼的態度とのゆえに、今日の偉大な発展を得、又、そのゆえにこそ、科学は人類の幸福に寄与し得たものであります。

この科学の特性は、特に今日の時機に、平和を創造し、平和共存を実現する上での最も重要な機能と言わねばなりません。

従って又、科学者は、真理の追究者として、現在の混沌たる政治・社会情勢の中で、人類が当面している核戦争の危機の根源を明らかにし、平和を創造する社会的責任を果さなければなりません。

さらに又、科学者は国際的連携によって、人類の幸福に寄与しうる科学技術の発展をうることには努力を拂わなければなりません。そのことは同時に、現在の国際緊張を緩和し、恒久平和を確立する上でも大きな貢献をなしている。

これらの任務を果すために、私達科学者は広く連帯感を以て団結し、任務を有効に遂行しうる態勢を整えると共に、他方、世界で初めて核兵器の惨禍を経験し、又、誇るべき平和憲法を支持成立させた日本国民の原水爆禁止運動が、過去において世界の核戦争を阻止する上で大きな貢献をして来たことを考へる時、この国民運動が、一致して正しい方向に押し進められるためにも、科学者として、その機能を役立てるという任務も重視しなければなりません。

去る5月7日（^{3日}）から、^{3日}間世界最初の被爆地広島市に近い広島県竹原市で行った平和創造のたりの会議を今終りに当って、私達の到達した結論の一部をここに述べて、広く同学の士、並びに国民の共感に訴えるものであります。